

広島平和記念公園設計者「丹下健三」氏について

小松社長様

2019年5月12日 細木様より メール受け

今朝、広島平和記念公園にズットナー像設置の構想について

お話していました折りに、公園設計者の「丹下健三」のお話をいたしました。

丹下健三さんは、愛媛県今治出身で、広島との縁は、広島大学出身ということにあります。

作品としては様々ありますが、有名などころでは、広島平和記念公園の他、大阪万博の基幹施設の設計責任者（岡本太郎の太陽の塔を設置する際に屋根を突き通すかどうかの議論の逸話は有名です）、

国立競技場などでしょうか。以下に、情報をお送りいたします。ご参考になるようでしたら幸いです。

■なぜ慰霊碑の向こうに原爆ドームが見えるのかー世界的巨匠が託した思い

<https://www.buzzfeed.com/jp/satoruishido/kenzo-tange-hiroshima>

なぜ慰霊碑の向こうに原爆ドームが見えるのか？ 世界的巨匠が託した思い

オバマが見た光景を作った男・建築家丹下健三

2016/05/26 18:59

Satoru Ishido

BuzzFeed Staff



←慰霊碑の先に、その姿を見せる原爆ドーム

2016年 オバマ大統領が見た光景

5月27日、広島。オバマ大統領はこの光景を生涯忘れないだろう。

戦後71年が過ぎ、初めてアメリカの現職大統領が被爆地、広島を踏んだ。広島平和記念公園、献花したアーチ型の慰霊碑の先に原爆ドームが見えている。被爆の悲惨さを、いまに伝える施設である。慰霊碑から原爆ドームが見えるのは、偶然の産物ではない。そこには一人の建築家の意志が込められている。彼だけが、取り壊しが検討されていた原爆ドームを、シンボリックなものと位置付けた。「悲惨な戦争を想起させるものは復興にそぐわない」「役に立たない」「経済的ではない」。こんな批判を受けながら、死者を慰霊する空間を作り上げた。彼がいなければ、オバマ大統領はこの光景を見ることはなかった。

建築家の名前を丹下健三（1913-2005年）という。丹下は建築界のノーベル賞と称される、プリツカー賞を日本人で初めて受賞した世界的な建築家だ。

なぜ、慰霊碑の先に原爆ドームが見えるのか。そこにはすべては設計に込められた、丹下の思想がある。



←広島市 広島市の地図に東西と南北の線を引くと……

左の地図を見てほしい。川を挟んで北限に原爆ドームがある。丹下案は、北の点に原爆ドームをとり、南に向かって一本の線を引く。その線を軸として、慰霊碑や広場を配置し、東西に平和記念資料館など一群の建築物を配置するというものだ。南北の線と東西の線、この線のなかに原爆の遺構、資料館、広場、祈りを捧げる場所がすべて収まっている。慰霊碑から原爆ドームが一望できるのも、丹下の計算通りだ。なぜ、丹下はここまで、広島に深く関わるのか。

1930年と1949年 丹下健三の広島。1930年と1949年。丹下の思いの一端に触れるには、この2つの転機に、時計の針を巻き戻す必要がある。

1930 年。丹下は愛媛県今治の実家を離れ、広島高等学校、いまの広島大学に進学する。

自伝「丹下健三 一本の鉛筆から」には、悩む青年、丹下の姿が淡々とした筆致で描かれている。

「理科」に進学したが、文学や芸術に惹かれていく。そんなとき、国立西洋美術館の設計者として知られる巨匠、ル・コルビジェの建築に出会い、魅了された。「理科」の知識とともに、芸術的な要素もある建築なら、情熱を持って取り組めるのではないか。

そう思い立った丹下は、世界的建築家への第一歩を、広島の地で踏み出した。

その後、東大、東大大学院と進学し、専門的に建築を学ぶ。院生時代には、戦時下の数々のコンペに入賞し、気鋭の若手建築家としての地位を確立していく。

1945 年 8 月、丹下に父が死んだと一報が届く。数日かけて列車の切符を手に入れた丹下は広島県・尾道まで行き、実家のある今治に向かう。途中、列車の中で、新型爆弾が広島に落とされたという話が、どこからともなく伝わってきたという。



1945年の広島。8月6日に原爆が投下された

←1945 年の広島。8 月 6 日に原爆が投下された

まもなく戦争は終わり、東大にも学生が戻ってきた。翌 1946 年、丹下はついに東大助教授となった。通称「丹下研究室」に学生が集った。主な仕事は、戦争で焼け野原になった日本各地の復興計画策定である。

丹下は広島市行きを自ら志願した。高校時代を過ごした広島に建築家として戻る。そう決めていた。

「いま広島にいれば原爆症にかかり死んでしまう」「(放射能の影響で) 草木も生えない」と噂も飛び交っていたが、丹下は気にしなかった。夜な夜な議論を重ねながら、高校生活を送り、建築家という職業を知った、いわば原点の土地だったからだ。丹下たちは広島県庁近くにトタン屋根の小屋を作り、1 ヶ月近く住み込んだ。食料の配給もごくわずか。空腹を抱えながらわずかに残された資料を漁り、新しい広島市の都市計画を作る。そして、最大の転機となる 1949 年がやってくる。

1949 年 すべてのアイディアが動き出す。ここに 1 本の論文がある。当時、36 歳の丹下が中心になった「広島市平和記念公園及び記念館競技設計等選図案」(以下、丹下案) だ。平和記念公園をどう設計するか。1949 年に開催されたコンペで 1 等を獲得した論文である。

占領下の日本で、広島市の顧問を務めていたイギリス軍の建築家は「五重塔」のような、平和記念塔を作ろうと主張していた、と丹下は述懐している(丹下『人間と建築』)。

モニュメントが一つあった程度で、何が残るのか。市民に忘れ去られるだけだ。丹下はこれに反対した。

広島は他の戦災都市とは違う。「世界平和の根拠地」ではないか。



丹下健三の論文

←丹下健三の論文

いまの平和記念公園は、丹下案をもとにしている。2 等案、3 等案では見向きもされなかった場所を、丹下案だけが重要なものとして位置付けていた。それが、設計を依頼された敷地の外にある、原爆ドームだ。

今でこそ、世界遺産に登録され、広島の象徴となっている原爆ドームだが、当時は保存されるかさえわからない状況が続いていた。審査評にも「(原爆ドームを) 一部で取り払うのをよしとする論もあるようだが」という言葉がある。

丹下は原爆ドームを残すべきだと考えていた。「原爆の恐ろしさ、残虐さ、非人間性、そうしたことを永久に忘れないために、もう二度と人類が原爆を使用しないために、このドームはシンボルとして残すべ

きだ」(「丹下健三 一本の鉛筆から」)、と。丹下だけが、残るかどうかもわからない原爆ドームの持つ「力」を信じ、平和記念公園と一体のものとして考えていた。



丹下は「爆心地に設けられる平和記念公園は、世界的な意味を持つであろう」と記し、建設の意味を、こう宣言した。

平和は訪れて来るものではなく、闘いとらなければならないものである。平和は自然からも神からも与えられるものではなく、人々が実践的に創り出してゆくものである。この広島を平和を記念するための施設も与えられ

た平和を観念的に記念するためのものではなく平和を創り出すという建設的な意味をもつものでなければならない。(丹下案) 爆心地としての広島が持つ記憶と、平和への希求から生まれる新しい施設。平和公園はそれらを統合した「平和をつくりだす工場」であること。これが、丹下が考えた被爆地・広島にある「平和記念公園」構想だった。

1955年 人々は集う、平和を発信するために

食うや食わずの生活に追い込まれたとき、丹下の建築は、短期的には何の役にも立たない。悲惨な記憶を思い出させる原爆ドームは、いつ撤去されてもおかしくなかった。

事実、批判の声はあった。その典型が平和記念資料館の1階部分だ。人々が通り抜けられるようにピロティ(高床形式)になっている。普段は、何もないスペースである。



←広島平和記念資料館

建築物の1階を使わず、柱だけが立つピロティなんて、目的もよくわからないし、経済的ではないものをなぜ作るのか。丹下は批判に屈しなかった。そこに数万人の群衆が集うことを念頭に置いていたからだ。原爆投下から10年が過ぎた1955年8月6日、設計に込めた思想は具現化する。

平和記念公園を、約5万の人々が埋め尽くした。ピロティは広場と一体となり、人々が行き来した。広島から、平和を創り出すために。『世界の隅のどの人の頭の上にも、あれが落ちるのを想像するだけでも、いやです』と感じ、また祈った(丹下、前掲書)、その思いを実現するために。この日、丹下は一連の作品が自分の手を離れ、人々の手にわたったと感じていた。そこに人が集い、祈り、考える。何かを実践すること。丹下はそこまで念頭に起き、平和記念公園を設計した。



そこから先の歴史は、多くの人が知るころだ。撤去と保存の間で揺れ動いた、原爆ドームは1960年代に入り、正式に保存が決まる。広島は長崎とともに被爆地として発信を続け、毎年8月、人々は公園に集う。

2016年5月27日 そして、広島に…

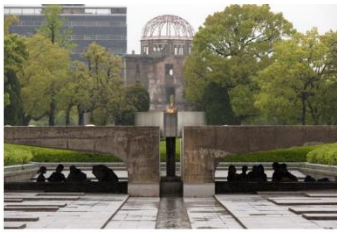
丹下がこの設計に込めた思想は単なる理想論だろうか。

いま、平和という言葉は、微妙な響と色調をもって語られている。むしろ平和を脅かすような問題が、再び堆積しつつあるのである。このようなときに、この平和への祈念は、素朴と一笑に付されるかもしれない。平和とは政治的均衡の問題であり、経済的安定の問題であって、単なる祈念のことがらではない、とある人びとはいうであろう。たしかにそれは平和の条件であろう。

しかし、と続ける。

人間が、その条件である政治や経済に抗して、平和を闘いとうとする精神の純粋な運動は、原子力時代の知性の新しい動向と思えるのである。(前掲「人間と建築」)

1954 年、41 歳の丹下健三が綴った一文である。平和は闘いとるもの。丹下の意志は揺るがない。



「知性」は原爆ドームを残し、広島は未だに発信地として、「平和をつくりだす工場」として稼働し続ける。そして戦後 71 年かけて、現職のアメリカ大統領を広島の地に呼ぶところまで、たどり着いた。

不経済と批判された丹下の意志は、いまでも広島に残っている。無意識のうちに、彼の問題意識を引き継ぐ、大勢の人びととともに。

■丹下健三について（丹下都市設計公式 HP より）

<https://www.tangeweb.com/company/kenzo/>

About KENZO TANGE 創業者丹下健三について



Photo by Hiroshi Nomura special thanks/Casa BRUTUS Magazine House Co.,ltd.

丹下 健三

1913 年、大阪府に生まれる。

1938 年、東京帝国大学工学部建築科を卒業。

ル・コルビュジェに傾倒し、その教え子である前川國男の建築事務所に入る。

1941 年、東京大学大学院に入学し、卒業後、1946 年から 1974 年まで母校で教鞭をとり、「丹下研究室」を主宰。浅田孝、大谷幸夫、沖種郎、神谷宏治、榎文彦、磯崎新、黒川紀章、谷口吉生ら多くの優れた人材を育成するとともに、ミラノ工科大学、ハーバード大学、清華大学など世界各国で教育に携わる。

1949 年、広島市主催の平和記念公園及び記念館のコンペで 1 等入選。

1951 年、CIAM（近代建築国際会議）に招かれ、広島の計画案を発表、海外の建築界にデビューする。

1950 年代は日本的伝統建築と西欧の近代建築のスタイルを融合し、地方自治体の庁舎など公共建築を数多く手掛け、庁舎のプロトタイプと目されている、コンクリート構造でありながら、伝統的建築の美しさを持つ香川県庁舎（1958）を発表する。

1960 年代には、成長する都市、東京をコミュニケーションのシステムによって捉える構造改革の必要性を強調した「東京計画 1960」を提案する。

1961 年に丹下健三＋都市・建築設計研究所を開設。そのころから「空間と象徴」という問題に取り組み、構造主義を発展させ、当時最大規模の吊り構造による国立屋内総合競技場（1964）とシェル構造による東京カテドラル聖マリア大聖堂（1964）を設計する。

1970 年代に入ると大阪で開催された、日本万国博覧会・会場マスタープランの設計（1970）など、日本の国家的事業に携わると同時に世界各国で建築及び都市計画に携わるようになる。

1986 年に行われた新都庁舎の指名競技設計で 1 等当選し、丸の内にあった旧庁舎に続いて新都庁舎の設計も担当する。また、同年「東京計画 1986」を発表。

その後、東京湾の開発が部分的に実現に向けて動き出す中、臨海副都心全体のシンボルとなりうるものとして、台場地区に最先端のメディアセンターというべきフジテレビ本社ビル（1996）が完成する。

海外においても、シンガポール都心に建つ超高層ビル群に活気のある新しいスカイラインを与えている OUB センター（1986）、UOB プラザ（1995）、フランス・パリ 13 区のイタリア広場に、都市計画的観点から複合施設のグラン・テクラン（1991）など多数の作品を手掛けている。

フランス建築アカデミー、イギリス王立建築家協会、アメリカ建築家協会の各ゴールドメダル、プール・ル・メリット勲章（西ドイツ）、文化勲章（日本）、プリツカー賞、レジオン・ドヌール勲章（フランス）を受賞し、アカデミーフランセーズ正会員（フランス）にも選出されている。

2005 年 3 月 没。

■新美術情報 2017 丹下健三 伝統と創造—瀬戸内から世界へ—

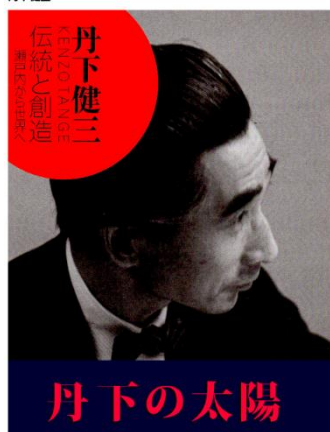
<http://kousin242.sakura.ne.jp/wordpress016/000-2/近代建築/丹下健三/>

新美術情報 2017 丹下健三

新美術情報2017

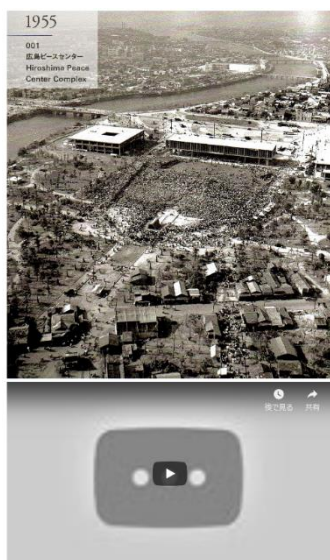


丹下健三



■時代を刻み、芸術を給合する

1945 年（昭和 20）の敗戦から 1970 年（昭和 45）までの四半世紀は、そのまま丹下健三の建築家としての前半期ということができる。この 25 年間は、新たな時代や社会の要求に応じて、それぞれの建築家が新しい建築の可能性に果敢に取り組み、日本でモダニズムの建築が幅広く展開した時代である。丹下は東京大学の研究室を拠点に活動を始め、多くの芸術家たちや優秀なスタッフとともに、時代を大きくリードした。



丹下の建築は、そこに集う人々・・・民衆・・・が空間を埋めた時に、最もドラマティックで生き生きとした表情を見せる。初の実作である広島ピースセンターも、まさに民衆のための建築として実現した。周辺にまだ木造のバラックが建ち並ぶなか、1955 年（昭和 30）の 8 月 6 日には、原爆で亡くなった人々を慰霊するため、6 万人が広島へつめかけた。

▶ヒロシマから万博まで

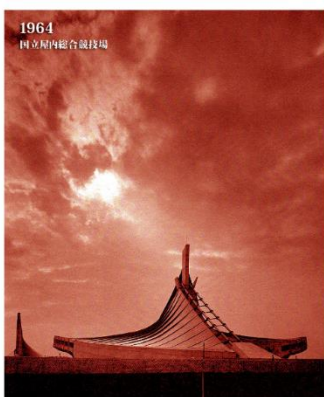
丹下の代表作である、広島ピースセンター、香川県庁舎、東京計画 1960、国立屋内総合競技場、日本万国博覧会基幹施設。これらは、平和記念（祈念）→戦後民主主義→国土計画→オリンピック→万博という日本の歩みを象徴する建築である。戦後復興から講和独立（1951 年）を経て、高度経済成長する日本の時代性がそこには込められている。20 世紀の日本で、これほど時代と分かちがたい作品を多作した建築家は、ほかにはいない。



夕景に映える香川県庁舎。室内の照明によって、木造建築を思わせる柱と梁の構成が美しく浮かび上がる。戦後民主主義の象徴となることが目指されたこの庁舎では、同時に鉄筋コンクリート造（RC 造）による日本の伝統表現が追求された。低層棟のピロティは庁舎を街に開放し、人々を大らかに招き入れる。



高度経済成長期の只中、「東京計画 1960」その構造改革の提案は、東京湾に海上都市を建設するという仮想的な計画案として発表された。皇居から千葉の袖ヶ浦まで、高速道路とモノレールによる 2 本の軸線を通し、住宅やオフィスを収容するメガ・ストラクチャーを集めた新都心。丹下はそのイメージを航空写真の上に重ね、壮大な都市スケールの未来を描いた。



東京オリンピックのために建てられた国立屋内総合競技場は、丹下の代表作であると同時に、現代の日本を代表する建築となった。空高く伸びる支柱から吊されたワイヤーが大屋根を形づくり、上昇性をもった荘厳な内部空間を生み出す。建築家の想像力とそれを支えた構造解析、さらに当時の施工技術が結集した記念碑的傑作。

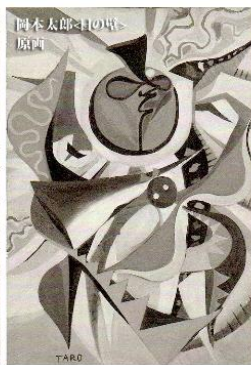


「人類の進歩と調和」をテーマにした日本万国博覧会（大阪万博）では、丹下と弟子たちが多くの施設・建築を手がけた。中心施設である「お祭り広場」の大屋根は、地上からの高さが30m、幅が108m×291.6mにも及ぶ最先端のスペースフレーム構造であり、岡本太郎に“ベラボーナ”太陽の塔のイメージを喚起させずにはいられなかった。

■芸術家とともに

天才というイメージが強い丹下だが、その創作は時として多くの芸術家・・・岡本太郎、イサム・ノグチ、猪熊弦一郎、シャルロットペリアン、剣持勇、勅使河原蒼風らとの協働に基づいていた。人々が集うオープン・スペースを中心に、壁画・彫刻・家具などの優れた現代作品を積極的に建築に取り入れ、より豊かな建築空間を生み出している。

さらに完成した建築は、石元泰博や村井修といった新進気鋭の写真家によって撮影され、写真が与える建築のイメージも十分意識しながら世に送り出された。いわば“総合芸術としての建築”という建築の古典的なあり方を、現代に則したかたちで実践したのである。



■岡本太郎（1911－1996）

旧東京都庁舎（1957年、現存せず）の壁画の石膏模型を制作中の岡本太郎。「私は建築に従属する装飾としてではない、もっと本質的な壁画を提唱したい」（岡本太郎「純粋芸術と建築の結合」（新建築 1958年6月号）。岡本は、妥協のない自律的な芸術作品を建築にぶつけ、せめぎ合わせることで、そこに新たな空間が生み出されることをめざした。



■イサム・ノグチ（1904－1988）

彫刻家のイサム・ノグチは、建築家との数多くの協働の際、自らの作品を、建築と呼応して空間を豊かにするものと捉えていた。丹下との協働は、広島平和記念公園に始まり、大阪万博や2代目の草月会席（1977年）などがある。写真は、脊口舌郎と協働した慶應義塾大学の萬来舎（1951年）の庭園に設置する彫刻の制作の様子。



■猪熊弦一郎（1902－1993）

一般市民に親しみやすい空間をめざした香川県庁舎の一階ロビーにおいて、画家・猪熊弦一郎による壁画が果たした役割は大きい。そもそも丹下を香川に導いたのが香川出身の猪熊であり、猪熊による金子正則香川県知事への推薦によって、丹下は県庁舎の設計を任されることになった。猪熊と丹下の交友は晩年まで続いていく。



■伝統を創造する 1946-58

▶広島から香川へ

戦後すぐの丹下の実作は、ほとんどが東京周辺と瀬戸内に集中している。特に瀬戸内での二つの大作、広島ピースセンターと香川県庁舎によって、丹下は日本を代表する建築家として世界に知られるようになった。戦後復興から講和・独立へと日本がアイデンティティを回復していくなかで、建築界では新たな時代の伝統表現が模索された。この課題に、丹下はモダニズムの建築として、独自の解答を出していく。

■都市の復興に向けて

敗戦とともに各地で戦災復興が始まり、丹下もいくつかの都市（広島・呉・前橋・福島・稚内等）の復興計画に関わった。また、公共建築や商業施設の設計も手がけるようになる。1946年（昭和21）、東京帝国大学（翌年、東京大学）工学部建築学科助教授になった丹下の周囲に、次第に若い才能が集まり、丹下研究室（通称「丹研」）の活動が始まる。

▶丹下研究室

丹下研は、東大工学部1号館長上階の彫塑室に製図機を載せた机を並べて部屋を「占拠」し、スタッフたちは自由な雰囲気の中で、スタディや製図に打ち込んだ。その後、1961年（昭和36）、都市・建築設計研究所（URTEC）が設立された。現在の丹下都市建築設計につながる組織である。

これにより、研究は東大丹下研究室、実務はURTECという役割分担が始まり、URTECの運営は神谷宏治に任された（～1971年）。



初期丹下研のメンバー 1955年（昭和30）、伊豆・土肥温泉への研究室旅行の一コマ。しばしば行われた研究室旅行では、全国各地で進みつつあった復興や開発の成果を見聞しつつ、スタッフの親睦が深められた。写真は、左から杉重彦・西原清之・田長島昭・磯崎新・長島正充・小槻貫一・浅田孝・光吉健次・吉川健・茂木計一郎・神谷宏治・岡村幸一郎。最年長の浅田は、この時34歳。

■復興に奔走する

敗戦後の1946年（昭和21）、丹下は戦災復興院の依頼で多くの都市復興計画を手がけ、原爆症で恐れられていた広島市内にも率先して足を踏み入れた。そして1949年（昭和24）5月、広島ピースセンターのコンペ開催が決定。平和記念公園のランドスケープデザインと平和会館が審査の対象となり、132の応

募案のなかで、丹下案が1等選ばれた。この頃、丹下は猪熊弦一郎の紹介でイサム・ノグチと出会う、ピースセンターで様々に協働していくことになる。

▶広島都市計画図

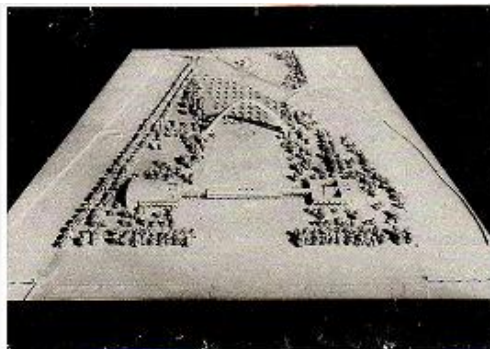


丹下や浅田らが広島に入った1946年(昭和21)の夏から秋には、既に広島市が道路や緑地の計画の大枠を決定していた。この計画に加わった丹下らの都市計画案は、1947年(昭和22)、広島市復興計画書議会にかけられ、1949年(昭和24)に決定された。このうち商業・工業地域の区分計画は、ほぼ丹下案のまま実現の方向に踏み出した。しかし、丹下らが主張していた旧中島町(現在の平和記念公園周辺)への官公庁の集中案は否決され、公園化が決定された。大幅な修正・変更が加えられたもの

の、丹下案は大枠としては広島の復興計画の中に活かされていくことになる。

▶広島平和平和総合公園計画 (1950年)配置図

丹下が広島平和記念公園コンペに一等当選した翌年の1950年(昭和25)2月にまとめられた、平和記念公園を含む都市中心部の総合的な計画案。広島城跡から100m道路に至る太田川沿いのエリアに、既に決定した平和記念公園に加え、図書館・美術館をもつ児童センター、体育館・テニスコート・陸上競技場・フットボール場・野外劇場などを配置し、広島城本丸跡には化学博物館・美術館・図書館を置く。広島子供の家(1953年)を除いて実現しなかったものの、結果的には現在の市街地再開発に一定の影響を与えているように見える。

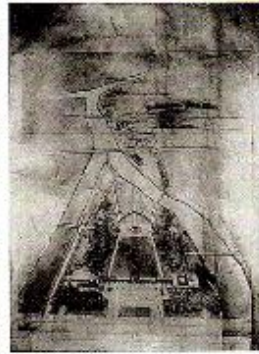
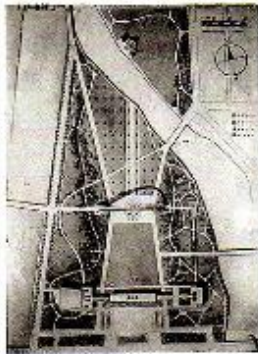


049 | 広島平和記念公園模型 | Model for the Hiroshima Peace Memorial Park
コンペ当選後、制作された縮尺1/200の模型(写真は、丹下が広島市の土木担当職員の高良茂に贈ったもの)。ピロティで持ち上げられた中央の廊下階の向こうに、建物を吊り下げた大コンクリートアーチ。そしてその先に、原爆ドーム。明快な軸線が伸びる敷地は、二つの台形が緩急を兼ねて向かい合う形で構成される。7年前に丹下が出した大東亜記念堂敷地計画が、「平和の工場」に姿を変えて再現されたとも評された。原爆館は、水平運搬窓と細く縦線を独立柱によるピロティをもっており、ル・コルブジエのサヴォワ邸(1931年)を彷彿とさせるデザイン。その後の実施設計の中で、左(西)側の公会堂とともに大きくその姿を変えていく。



左:050 | 完成直後の広島平和記念公園模型 | Model of the Hiroshima Peace Memorial Park
模型は石膏製。制作を担当した植野石膏模型は、1924年(大正13)創業で、当初は天井廻り線など建物の内装施工が業務の中心だった。石膏施工業者としては後進組だったが、型紙の技術を向上させることで装飾パーツの量産化、施工の効率化に成功し、戦後、建築模型制作に本格的に乗り出すことになった。

右:051 | 模型を眺める丹下 | Tange looking at model
植野石膏模型製作所を訪れた丹下。模型中央の大アーチを眺める。右側は模型製作所の植野正一。



左:052 広島平和記念公園平面図 | Plan of the Hiroshima Peace Memorial Park
右:053 広島平和記念公園西側図 | Plan of the Hiroshima Peace Memorial Park
広島市長選挙職員・藤本千太郎氏に丹下が送った写真。コンペ案の区画を撮影したもの。合形が向かい合う鼓形の配置計画がよく分かる。下端(南端)には、敷地の形を決める基準線となった100m道路。



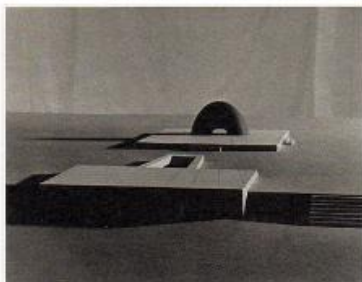
061 | イサム・ノグチ 平和大橋欄干「創」 | Peace Bridge balustrade "Tsukuru" (To Build)
1953年(昭和28)1月に完成した平和大橋。この欄干をノグチは「創(つくる)」と名づけた。彼自身はデザインの意味について語らなかったが、力強く昇る太陽のような形象は、誕生を意味すると理解された。



062 | イサム・ノグチ 西平和大橋欄干「行」 | Peace Bridge balustrade "Yuku" (To Depart)
平和大橋と同月に完成した西平和大橋。欄干は「行(ゆく)」。船のへ先をイメージしたデザインであると言われている。



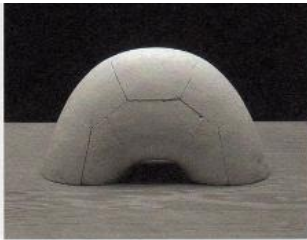
063 | イサム・ノグチ 平和大橋欄干「創」 | Peace Bridge "Tsukuru" (To Build)
平和大橋が架かる元安川で遊ぶ子どもたち。欄干の力強さと、子どもたちのエネルギーが、新しい時代を象徴するかのようである。



064 | イサム・ノグチ 原爆慰霊碑模型(地上部) | Model for the Hiroshima Peace Memorial (above ground)
丹下の紹介で慰霊碑を制作することになったノグチは、1951年の暮れに丹下楨で「同様に遇かれた人のように、粘土と闘いはじめた」(丹下健三「五万人の広場」『芸術新潮』1956年1月号)。
完成した慰霊碑模型は、地下の慰霊堂から地上に突き出すもので、手前側に慰霊堂への入口が見える。地上部分の碑の高さは5mとされた。ノグチが制作した慰霊碑の模型は、その後、行方不明だったが、2003年(平成15)に神奈川県立近代美術館の収蔵庫で発見された。地上部は黒く着色され、地盤との接合部に溝が切られている。縮尺は約1/20。伝来の詳細は不明だが、1952年9月に同館でイサム・ノグチ展が開催されており、この時に搬入された可能性がある。



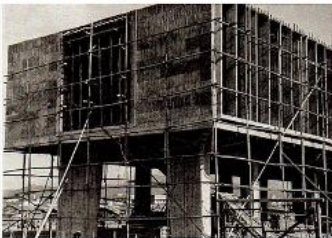
065 | イサム・ノグチ 原爆慰霊碑模型(地下部) | Model for the Hiroshima Peace Memorial (underground)
地下部分の断面模型。力強く立ち上がる慰霊碑。「古代の玉のようなおらかさをもっていた。私はすばらしいものと感じることができた」(丹下健三『五万人の広場』『芸術新潮』1956年1月号)。模型を見た丹下の感想である。しかし、広島平和記念公園専門審議会の席上、原爆による死者の慰霊彫刻をアメリカ人が制作することへの反発から、岸田日出刀の強硬な度合いに達う。結果、ノグチの反論も空しく、この案は実現には至らなかった。「当初のハニワの構想にかえて」丹下が慰霊碑を設計することになり、1952年(昭和27)8月に完成した。



066 | イサム・ノグチ 原爆慰霊碑模型 | Model for the Hiroshima Peace Memorial
1952年(昭和27)、晩年のノグチによる習作。当初の模型と比べると、頂部の丸みが緩やかになっており、また亀甲状に分割されたパーツの組み合わせであるなどの相違点がある。慰霊碑模型はこの他にも、1952年制作の玄武岩製、縮尺1/5模型(広島市現代美術館所蔵)がある。
ノグチは晩年まで広島慰霊碑案に強い思いを抱いており、丹下設計のRC流線型石碑が老朽化のために御影石造に更新される際にも(1985年)、丹下に自らの案での再建を働きかけた。



067 | 建設中の陳列館 | Museum under construction
丹下が広島で撮影した写真のうち最もよく知られたものの一つ。平和会館が建てられた場所は、広島市内有数の機軸をもつ古刹・誓願寺の境内だった。境内北側は墓地であり、会館の建設途中もなお、多数の墓石が残されていた。林立する墓石の背後で、力強く立ち上がる「平和の工場」。丹下自身がシャッターを切ったこの写真からは、「この土地の持つ意味と、そこに新しく建設される施設との調和のなかに生れてくる」(丹下健三『広島市平和記念公園及び記念館建築設計図案』『建築雑誌』1949年11月号) 平和へのイメージが読み取れる。小サイズのプリントに、丹下自身によるトリミング指示がなされ、雑誌などに掲載された。



068 | 建設中の陳列館 | Museum under construction
no.067と同時の撮影と思われる写真。外部・内部ともに丸太足場が組まれている。設計時に花崗岩貼りが計画されていた外壁は、長い間コンクリート打ち放しのままであり、竣工から20年以上経過した1979年(昭和54)、ようやく当初案のとおり仕上げられた。



069 | 建設中の陳列館 | Museum under construction
1952年(昭和27)7月1日撮影。南側からの眺め。no.067・068とはほぼ同時期の撮影と見られるが、no.067で写っていた建設用リフトが見られず、やや進捗した状況と推測される。手前になる建設中の100m道路では、練石など多量の石材が必要とされ、その施工には、後に香川県庁舎で丹下らと協働することになる香川の石工(岡田石材工業)も加わっていた。



070 | 建設中の慰霊碑 | Memorial under construction
1952年(昭和27)5月30日撮影。木材(杉板か)を組み合わせ、コンクリートを流し込むための型枠が作られている。



071 | 建設中の広島平和記念公園で遊ぶ子どもたち | Children playing at the Peace Memorial Park still under construction
1952年(昭和27)撮影。慰霊碑に現場打ちされたコンクリートの養生が見られ、また陳列館の丸太足場が外されていることから、no.069・070よりも後の時期、7月中旬から8月6日の竣工までに撮影されたと考えられる。各所に金網が張られているが、未整備で砂地のままの敷地は、子どもたちの格好の遊び場となったようである。



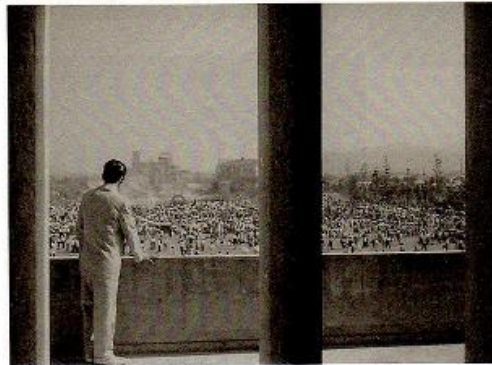
072 | 建設中の広島平和記念公園 | Hiroshima Peace Memorial Park under construction

1954年(昭和29)12月2日撮影。木造家屋やバラックが密集して広島湾まで連続するなか、整然と建ち上がる陳列館と、整備されつつある平和記念公園。しかし慰霊碑の手前には、いまだ多くの木造バラックがひしめいており、そこを切開するさきがけとして公園の制溝が通されている。その端には、住民と見られる数人の人影と、物干ざおに掛けられた洗濯物が見える。



073 | 1954年の平和記念式典 | Peace Memorial Ceremony in 1954

1954年(昭和29)8月6日の平和記念式典。慰霊碑と原爆ドームとの間のバラック民家はまだ完全には立ち退いておらず、それを覆い隠すように式典会場には幕が張られている。



074 | 陳列館から平和記念式典を眺める丹下 | Tange watching the Peace Memorial Ceremony from the museum

1955年(昭和30)8月6日。陳列館の2階から式典の様子を眺める丹下の後ろ姿。



075 | 完成した慰霊碑と陳列館 | Completed memorial and museum

写真家・石元泰博による撮影。広島平和記念館は、原爆被下10周年を目標に建設が進められていた。目標の前年の1954年(昭和29)には、既に竣工していた陳列館と慰霊碑に加え、本館(左側)も姿を現していた。no.072で見て取れるように、公園の整備は終了していなかったが、丹下にとっての実作第1号がようやく立ち上がった。



076 | 慰霊碑から見た陳列館 | View of museum from the memorial

no.075と一連の撮影になると推測される写真。陳列館のピロティから慰霊碑に向かって真っ直ぐ伸びる軸線の存在が強く感じられる。この軸線の先(手前側)に原爆ドームがある。



077 | 完成した陳列館 | Completed museum

これもno.075-076と一連の撮影か。ピロティ中央部の柱間に、切り取られた風景のように原爆ドームが見える。当時、原爆ドームの保存には否定的な意見も多く見られたが、軸線の先に原爆の惨禍を象徴するドームを置いた丹下のプランニングは、後世に向けての強いメッセージとなった。陳列館のピロティの太い柱は、当初案(no.049)のそれとは異なり、ル・コルビュジエの影響が感じられる。

■丹下健三とイサム・ノグチの交流

和泉正敏

▶新しい風

丸亀高校の先輩、猪熊弦一郎先生に私は広い意味での芸術を教わりましたと、金子知事は感謝し、尊敬して居られた。猪熊先生の粋な計らいによって、建築家の丹下健三先生と金子知事は瀬戸内海を渡る船中で出逢い、香川の地に新しい風が吹き込むことになりました。



当時、丹下先生は40代前半、東京都庁舎を設計され、日本におけるモダン建築を香川にもと訪れていました。田園都市香川を目指す金子構想が実現に大きく近付く一歩でもありました。新しく建設された香川県庁舎は伝統美と現代性が融合して素晴らしく、猪熊先生の壁画は広い空間で見事に生かされ、剣持勇、亀倉雄策民らも加わり、更に充実。金子知事は随所に地元の素材を使用し、ロビーと庭は多くの人達によって完成しました。



池の中には、採石場で今、掘り出されたばかりの大きい石が配され、自然石の一部を加工した受付カウンター、高島から出た黒い玉石と小豆島産の牧石による清楚な床面。従来の庭石、墓石、灯籠を見て育った私は、県庁舎で初めて新鮮な石の生かし方に触れ、石に対する新たな希望が湧いてきたのです。

その頃、彫刻家イサム・ノグチ先生は、東京、慶應義塾大学の新萬来舎（1950年）、リーダーズ・ダイジェスト社の庭を創られ（1951年）、続いて、パリのユネスコ本部の庭園（1958年）構想を描き、丹下研究室で模型を作っておられました。その後、横浜の「こどもの国」で、最初に遊園地の設計が実現され（1966年）、イタリアのボローニャでは、丹下先生の建築の前に石の彫刻新萬来舎（1979年）を設置されています。

▶広島

ノグチ先生は、戦後焼け野原と化し混沌とした日本・東京に、ニューヨークから諷爽とモダンアートを携えて来たとされます。丹下健三先生と共に、復興の為に広島に向かわれ、その慈しみと勇気は、平和大橋の欄干「つくる」と「ゆく」となり、戦争で恐怖に懷(いだ)いた多くの人々に元気を与えました。丹下先生は、平和記念公園、原爆記念陳列館、原爆慰霊碑等の設計に着手され、ノグチ先生もそれに協力し、素晴らしい空間と建築、慰霊碑は世界の人々が平和を願って集まる場を生みました。ノグチ先生は、晩年まで原爆慰霊碑に思いを寄せ、その意を汲んだ石の作品も生まれ、人類が仲良くするために彫刻を創ることを使命としておられたのです。1951年に広島から東京へ帰る途中、岐阜市長の要請で提灯の産地に立寄られ〈あかり〉を発案、被災者の心を灯すあかりだったのでしょう。広島に多くの想いを残されましたが、ノグチ先生自身、いろいろと体験し学ばれた時間だったと思われます。

▶出会い

1956 年、ノグチ先生は、ユネスコ本部の庭づくりの為、重森三玲氏らと徳島県、鮎喰川で青石を選ばれた後、猪熊先生から、私の郷里にも良い石がありますから金子知事を訪ねて下さいとの紹介を受け、香川県庁に金子知事を訪問。お二人は意気投合し、知事の案内で、牟礼、庵治の石材産地、小豆島の石堀場を見て廻り、小豆島の石もパリの庭に生かされています。1964 年、ノグチ先生は再び香川を訪れ、金子知事は完成した県庁舎を案内、県内を再度まわられて、石のアトリエで私はお目にかかることができました。



それ以後、金子知事は山本忠司氏（県建築課）と共に、イサム・ノグチ先生との長い付き合いが始まりました。

アメリカに帰国後、ニューヨークのノグチ先生から小作品の石膏模型が 6 個届けられます。それをカンカン石等、珍しい石で仕上げた頃、再びアトリエに見えられました。その時がシアトル美術館前に置かれる大きい石の彫刻《ブラック・サン》（1969 年）の始まりでした。

▶イサム家・アトリエ・庭園

1960 年代末、アトリエの建設に関して、候補地を県でも選んで下さいましたが、「景色は心の中にあるもの、一番仕事のしやすい所にして下さい」というノグチ先生の言葉が、世界を旅した芸術家の牟礼におけるアトリエ造りの第一歩でした。採石場を望む田んぼの中に、円型の石壁を造り、丸亀の塩飽町から入江邸を移築。入江邸は、昔、船大工さんが陸に上がって建てた住宅で、機能美、シンプルさを兼ね備えており、次第にノグチ先生も熱意を示され、食事もそこそこに山本さんと、空間、風通し、生活の仕方などを打合せされ、随分時間をかけて大工さん、左官さん、石のアトリエの若人、地元の人達で完成（イサム家、1970 年）。ノグチ先生は木造家屋の中に、スウェーデン、アフリカ産の黒い花崗岩による割れた肌、磨かれた彫刻を置かれ、縁側を通した庭には、地面に横たわるように、《地表の風》を並べ、部屋の中から畳を通してながめる庭の空間は、イサム芸術の神髄ともいえます。

イサム家の裏山に、石の作品づくりは疲れるから昼寝の場を造ったらと、庭づくりが始まりました。毎日が試練の連続でしたが、仕上がってくるほどにノグチ先生も熱が入り、自然に立ち向かった日々だったと思います。屋島と五剣山の間に自然を生かした心の休まる空間が生まれ、アトリエの中では、新たな石の生命を求めて、彫刻づくりに没頭されていました。

▶大阪万博



1970 年、丹下先生は大阪万国博覧会会場基幹施設の設計と総指揮を行われました。お祭り広場の大屋根が 1 日 1 日ジャッキでせり上がって雄姿を現し、岡本太郎氏の《太陽の塔》が輝き、ノグチ先生は会場内で 7 つの噴水を創作、丹下先生の期待に応えるべく、イサム家の 2 階で夜も噴水の出口ノズル等を考案し、模型を作られました。初めて上空から勢いよく流

下する水は生命を宿しているように見え、イサム・ノグチは満面の笑み浮かべ、関係者全員で喜びを分かち合いました。カラフルでモダンな噴水は、猛暑の会場内に潤いと涼しさを与え続けたのです。

▶香川の建築



1964 年、高松市内の福岡町に丹下先生設計による舟形の美しい香川県立体育館が現れました。香川での建築に関して山本忠司氏への信頼は高く、体育館の両サイドの広い池の中には、庵治石による大屋根の水受けを兼ねた石庭が、山本氏によって完成しています。

その頃、瀬戸内海を見渡す五色台にスカイラインの建設計画が始まり、丹下研究室の建築家浅田孝氏ら大勢が香川を訪れ、近代香川の幕開けのようでもあり、素晴らしい道路が完成（1964 年）。五色台山の家、科学館等も落成、中学生らの屋外教育として現在も活用されています。

その後、瀬戸内海歴史民俗資料館建設の企画が持ち上がり、山本忠司氏ほか県建築課の人達によって設計されました。整地と基礎掘りのため岩盤を掘削し、掘り出されたたくさんの石を地上に高く積み重ね、空と海と自然に融け合う素晴らしい建築となり、生活用具、大きい木造船も保管され、日本建築学会賞を受賞。後年独立した山本氏は、瀬戸大橋記念館を設計し、完成させました（1988 年）。

▶草月会館

丹下先生は 1958 年、東京青山に、いけばな草月流の草月会館を建てられ、1977 年には新しい草月会館が完成し、私は町の中にそっと真珠箱のような建築 を置きたかったと語っておられます。ノグチ先生は ロビーの設計を依頼され、花と石と水を用いた《天国》と名付ける石庭を造りました。

ある時、突然にノグチ先生から電話をいただいたのです。「和泉さん、すぐに石と槌とノミを持って草月に来て下さい。その方が早いと思うんですよ」。あまり意味が分からず「はい」と答え、東京に向かいました。ノグチ先生と蒼風家元がいらっしゃる部屋に入るなり、瀬戸内海の石を置いて見て頂きました。「ノミで彫って見たら」と言われ、美しい部屋で恐る恐るノミで石をはつりましたが、「もっと強く彫ったら？」とノグチ先生に言われ、思い切りノミを叩きました。その一瞬で、草月会館のロビーに石庭を造ることが決定したのです。

蒼風家元は、完成した空間に大木を生け、随所に花を生けられ、ロビーの空間は、丹下健三、勅使河原蒼風、イサム・ノグチの三者によって世界に通じる広場となり、スウェーデンの黒い御柱を前に家元は「これは日本人の魂だ」と絶賛、ノグチ先生を喜ばせました。

現在、草月会館の中心のスリットから新宿を望むと丹下先生設計の東京都庁舎が正面に見え、その庁内にイサム・ノグチの彫刻《沈黙の歩み》が設置されたのは、まさに奇遇であり、見えない信念で結ばれるお二方のような気が致します。

▶財団設立へ

1988年、84歳の誕生日を2日後にひかえたノグチ先生は、新しく移築された蔵の中で、高松空港前に作られる彫刻（後に平井知事によりノグチの手記の言葉を用いて《タイム・アントスペース》と名付けられる）、北海道大通り公園の《ブラック・スライド・マントラ》、そして札幌モエレ沼公園の模型を完成披露され、平井知事ら関係者で祝しました。ノグチ先生は、11月17日、84歳の誕生日には金子元知事、



山本忠司、三宅一生両氏、アトリエの若い人たち、大工さんら多くの人に囲まれ心よく過ごされ、高松空港を発、東京では丹下先生を訪ねられ、歓談されたのです。

突然の言卜報は暮れも押し迫った12月30日でした。昭和の終焉も近づいていた頃です。

丹下先生は突然、只一人イサム家を訪ねて見えました。静かにイサム家に座り、アトリエ内を歩き帰りましたが、ノグチ先生の友人として感慨深いものがあつたと思われます。イサム・ノグチの生活したアトリエ空間を、財団法人を設立して後世のために美術館として残しましょうと、設立発起人代表として計画を進めていただき、ニューヨーク財団理事長アイザック・シャピロ氏に、現状のままこの空間を残す重要性を手紙で伝えて下さったのです。

日米のイサム・ノグチを知る美術関係者、高階秀爾、小倉忠雄、中原佑介、酒井忠康、トーマス・メッサー、アン・ダナンコート、シャーマン・リー、ブルース・アルトシュラー氏らによって将来の美術館としてのあるべき姿が、長い時間をかけてイサム家で話し合われました。

そして金子先生、山本忠司氏にも見守っていただきながら、イサム・ノグチNY財団、香川県、多くの人達によるご支援の結果、1959年に、日本で珍しく官・民・企が一体となったイサム・ノグチ財団が設立されたのです。名誉顧問には丹下先生に就任いただき、理事長は斎藤裕氏にお願い致しました。

猪熊先生が生前、ご夫妻でお見えになられ、初めてアトリエの中に入った文子夫人は、ノグチ先生に「イサムさん、あなたは四国にこんなに素晴らしいものを残して下さいましたね」と心から喜ばれました。戦後まもない頃の金子正則知事の郷土への想いは、多くの人達の単なる集まり、頼ものでは終わらず、明日の香川へ向かって大事な布石となりました。



20世紀の初め、飛行機と共に育ったノグチ先生による彫刻。《タイム・アンド・スペース》は、1989年、高松空港開港に合わせ、石組によって空港前の広場に完成し、空港を訪れる人たちを暖かく迎えています。

2000年には丹下先生による新庁舎が落成し、ノグチ先生の作品《アーケイック》が、庁舎内の空間に設置されることになりました。

丹下健三 出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

丹下 健三（たんげ けんぞう、1913 年（大正 2 年）9 月 4 日 - 2005 年（平成 17 年）3 月 22 日）（91 歳没）は日本の建築家、都市計画家。

一級建築士（登録番号第 15182 号）。

日本では「世界のタンゲ」と言われたように、日本人建築家として最も早く日本国外でも活躍し、認知された一人。第二次世界大戦復興後から高度経済成長期にかけて、多くの国家プロジェクトを手がける。また磯崎新、黒川紀章、槇文彦、谷口吉生などの世界的建築家を育成した。位階勲等は従三位勲一等瑞宝章、文化勲章受章。フランス政府よりレジオンドヌール勲章受章。カトリック信徒（洗礼名：ヨセフ）。



年譜

1913 年（大正 2 年） 丹下辰世（ときよ）とテイ（禎・禎子）の三男として大阪府堺市に生まれる。住友銀行社員であった父の転勤によって生後まもなく中国の漢口へ。数年後さらに上海のイギリス租界に移り住む。

1918 年（大正 7 年） 上海・日本尋常小学校入学。

1920 年（大正 9 年） 父の出身地である愛媛県今治市に家族で移住。今治の第二尋常小学校（現・今治市立吹上小学校）に編入。

1926 年（大正 15 年） 旧制今治中学（現・今治西高校）入学。

1930 年（昭和 5 年） 今治中学四年修了（飛び級）で旧制広島高校（現・広島大学）理科甲類に進学。同校図書室で見た外国雑誌のル・コルビュジエの記事に感銘を受け建築家を志す。ル・コルビュジエを通して一時傾倒していたマルクス主義から実存主義に転向する[1]。

1933 年（昭和 8 年）～1934 年（昭和 9 年） 東京帝国大学建築科の受験に 2 度失敗。東北帝国大学金属学科に毎年 1～2 名の欠員が出ると聞き受験するが、丹下が受けた年に限りたまたま 1 人だけ定員を超えており、丹下のみが落第する。徴兵逃れのため日本大学芸術学部映画学科に在籍したがほとんど登校せず、ヴァレリー[要曖昧さ回避]、ジード[要曖昧さ回避]、ブルースト、ドストエフスキー、ヘーゲル、ハイデggerなどを読み耽り、名曲喫茶で友人と語り合い、バーに出没した。「なぜ二年間にもなったかといえば、多感な青春時代、情熱をもって取り組む対象がどうしても文学だとか芸術だとかに偏ってしまったから、ということにしておきたい」（丹下健三『一本の鉛筆から』p.25）。丹下はまた「日大の映画科には籍を置いたままで終わった。しかし、私は映画には大変興味を持っていて、そのころからしきりに言われた「総合芸術」に取り組んでみようと思ったことがあったのも事実である」（丹下健三『一本の鉛筆から』p.27）とも述べている。同時期の日大芸術学部には黒澤明がいたとする資料もある。

1935 年（昭和 10 年） 東京帝国大学（現・東京大学）工学部建築科に入学。内田祥三、岸田日出刀、武藤清に師事。1 学年上に立原道造が在籍していた。

1938 年（昭和 13 年） 東京帝国大学工学部建築科より辰野賞を受賞。東京帝国大学工学部建築科卒業後、前川國男建築事務所に入所。当時の担当作品に岸記念体育会館（初代）があるが現存しない。

1941 年（昭和 16 年） 東京帝国大学大学院に入学し、高山英華の研究室に入る。

1942 年（昭和 17 年） 大東亜建設記念造営計画設計競技に 1 等入選。

1946 年（昭和 21 年） 東京帝国大学大学院修了後、同大学建築科助教授に就任。いわゆる「丹下研究

室」を作る。

1951 年（昭和 26 年） CIAM（国際近代建築会議）に招かれ、ロンドンで広島計画を発表。初めての日本国外旅行となる。

1954 年（昭和 29 年） 日本建築学会作品賞（愛媛県民館）。以後同賞受賞がつづく（1955 年図書印刷原町工場、1958 年倉吉市庁舎）。

1958 年（昭和 33 年） アメリカ合衆国建築家協会（AIA）第 1 回汎太平洋賞受賞。

1959 年（昭和 34 年） 東京大学より工学博士の学位を受ける。博士論文は「大都市の地域構造と建築形態」。

1963 年（昭和 38 年） 新設された東京大学工学部都市工学科教授に就任。

1965 年（昭和 40 年） 日本建築学会特別賞（国立屋内総合競技場）。イギリス RIBA ゴールドメダル受賞。

1966 年（昭和 41 年） アメリカ合衆国 AIA ゴールドメダル受賞。

1970 年（昭和 45 年） ローマ法王庁聖グレゴリオ大勲章受章。

1973 年（昭和 48 年） フランス建築アカデミー ゴールドメダル受賞。

1974 年（昭和 49 年） 東京大学を定年退官、名誉教授となる。

1976 年（昭和 51 年） 西ドイツ政府プール・ル・メリット勲章。

1979 年（昭和 54 年） イタリア国家有功勲章コメンダトーレ章。

1980 年（昭和 55 年） 文化勲章受章。

1984 年（昭和 59 年） フランス芸術文化勲章コマンドール章。

1986 年（昭和 61 年） 日本建築学会大賞（日本における現代建築の確立と国際的發展への貢献）。

1987 年（昭和 62 年） アメリカ合衆国プリツカー賞受賞。新日本建築家協会（現在の社団法人日本建築家協会）初代会長（1988 年まで）

1993 年（平成 5 年） 高松宮殿下記念世界文化賞建築部門受賞。

1994 年（平成 6 年） 勲一等瑞宝章受章。

1996 年（平成 8 年） フランスレジオンドヌール勲章受章。

2005 年（平成 17 年） 3 月 22 日死去（91 歳）。贈従三位。

業績

広島平和記念資料館 1955

東京カテドラル聖マリア大聖堂 1964

山梨文化会館 1966

東京都庁舎第一本庁舎 1991

1939 年（昭和 14 年）、丹下は雑誌『現代建築』に論文「ミケランジェロ頌・ル・コルビュジェ論への序説として」を発表し、つづく 1941 年（昭和 16 年）に前川国男建築設計事務所で岸記念体育会館（初代）の設計を担当したが、その名が一躍世に知られるようになったのは、1942 年（昭和 17 年）の大東亜建設記念営造計画コンペと、それに立て続いて 1 等入選を果たした、1943 年（昭和 18 年）の在盤谷日本文化会館計画コンペによってである。

特に大東亜建設記念営造物コンペの丹下案、「大東亜道路を主軸としたる記念営造計画・主として大東亜建設忠霊神域計画」は、ヒューマンスケールを遥かに超えた壮大なプランと、横山大観風の日本画を想

わせるそのパースペクティブ（透視図）によって、本来建築学会の若手を対象にした懸賞行事であり、それゆえ到底実施案となり得なかった地味なこのコンペをして、後世まで人々の記憶に留めさせることになった。

同時期の大学院時代から第二次世界大戦後しばらくにかけては、主に都市計画の研究・業務に従事。人口密度や交通現象、都市デザイン等の研究を続け、それらの成果を第二次世界大戦後に日本建築学会で発表し、後にそれをもとに 1959 年（昭和 34 年）に博士号学位論文「都市の地域構造と建築形態」としてまとめ上げる。また、1946 年（昭和 21 年）8 月に東京大学助教授に就任すると、福島市の依頼による福島地区都市計画（1947 年）や立川基地跡地の文化都市計画、北海道稚内市の都市計画（1950 年から 1952 年まで）などを手がけていった。その間の 1948 年（昭和 23 年）には「建築をめぐる諸問題」、また二年後の 1950 年（昭和 25 年）には経済安定本部資源調査会事務局地域計画班の依頼による「地域計画の理論」という 2 つの計画関連の研究小論文を執筆しているほか、戦災復興事業の一環で行われた東京都市計画コンペや文教都市計画、1947 年から戦災復興院（後の建設省。現・国土交通省）による各地の戦災復興都市計画に参加した。当初の担当は群馬県前橋市と伊勢崎市であった。

広島に原爆が投下された 1945 年（昭和 20 年）8 月 6 日には、父危篤の知らせを受け帰郷の途にあつて尾道にいたが、焼け野原となって跡形も無くなっていた実家に到着した翌 7 日、父はすでに 2 日に他界しており、また広島市への原爆投下と同じ日に実施された今治への空襲によって、最愛の母をも同時に失っていたことを知らされる。壊滅的被害を受けた広島は、外国の雑誌でル・コルビュジエのソビエト・パレス計画案と出逢い、建築家を志した思い出の地でもあった。その広島の復興計画が戦災復興院で俎上にのぼっていることを知るに及んで、残留放射能の危険性が心配されたにもかかわらず、丹下は志願して担当を申し出た。浅田孝・大谷幸夫ら東大の研究室のスタッフとともに 1946 年の夏に広島入りし、都市計画業務に従事した。その成果は、広島市主催の広島平和記念公園のコンペに参加した際、見事 1 位で入選という形で結実する。

他の設計案が、公園内のみを視野に入れた計画案にとどまったのに対して、**丹下は広島市を東西に貫く平和大通り（幅員 100m、長さ 4km にわたる通称 100 メートル道路）と直交する南北軸線上に、慰霊碑と原爆ドームを配し、その計画案の都市的スケールが、コンペで高く評価された理由である。広島の復興計画において、この市街地を十字型に貫く都市軸を通したことで、第二次世界大戦後の広島市の骨格を作ったのは丹下であると言える。またこれにより、当時は単なる一廃墟に過ぎなかった原爆ドームにスポットライトを当て、中心性を持った都市空間として広島を再建する上での、ランドマークとしての「原爆ドーム」を発見したのは、事実上、丹下であると言える。**

実際、1966 年（昭和 41 年）7 月の広島市議会において、満場一致でその永久保存が決まるまで、「原爆による惨禍の証人として保存する」意見と、「危険物であり、被爆の惨事を思い出したくないので取壊す」との意見の対立があったのである。しかしながら今日に至ってみれば、日清戦争当時大本営がおかれて臨時首都となり、明治以来、広島城を戴く広大な西練兵場を都心部に抱えた軍都として発展してきた広島市が、平和都市広島に生まれ変わるためには、広島城に代わる新たなシンボリックな遺構をそこ

に設定する必然性が確かにあり（原爆で倒壊焼失した広島城が再建されるのは 1958 年のことである、それを見抜いた丹下の方に、都市計画家としての先見性があったと評価出来る。

同時期、第二次世界大戦後の日本建築界の幕開けを告げる、当時日本最大級のコンペであった世界平和記念聖堂の建築競技設計でも衆目を集めるが、施主であるカトリック教会が、丹下案と類似するオスカー・ニーマイヤー設計のブラジル・パンプーリャのサン・フランシスコ礼拝堂に見られる放物線状のシェル構造が持つ、その非宗教伝統的な形体と音響の悪さを嫌って、丹下案は不採用（1 等なしの 2 等当選）となった。後にその実施は、コンペの審査委員の一人で、コルビュジエ派である丹下案を酷評した表現派の村野藤吾が担当することになり、日本建築界の一大スキャンダルとなる。

そのような経緯もあり、資材の払底した第二次世界大戦時中ならびに第二次世界大戦終決直後に若年期を過ごさざるを得なかった丹下健三にとっては、広島平和記念資料館は事実上のデビュー作である。コンクリート打放しの端正なプロポーションを、都市的スケールのピロティで大地から軽々と持ち上げることによって、広島の焦土からの復興を力強く印象づけ、第二次世界大戦後の日本建築はここから始まったと言われるほどの記念碑的な作品ともなった。コルビュジエのスイス学生会館やソビエト・パレス計画、またユニテ・ダビタシオンの影響だけでなく、法隆寺や厳島神社の伽藍配置、また正倉院・伊勢神宮・桂離宮などの日本建築の精華にデザインソースを求めたこれら一連の広島ピースセンターの建築によって、西洋起源のモダニズムと日本建築の伝統様式は初めて記念碑的レベルで結晶し、丹下はこの広島計画をもって、CIAM（シラム・近代建築国際会議）に参加し、その名を日本国外に知らしめた。

また、丹下はこの事業にイサム・ノグチを強く推して参加させたが、当時建設省の広島平和記念都市建設専門委員会委員長であり、また丹下の恩師でもあった岸田日出刀の「原爆を落とした当のアメリカ人の手になるもので、爆死者の慰霊になるのか」という強い反対意見により、慰霊碑はノグチのデザインが却下され、丹下自身が担当することになった。丹下は、岸田らの介入に対する不快感とノグチへの申し訳なさもあって、ノグチのデザインをほぼそのまま流用しながら、自分自身の当初の構想に立ち返って埴輪の家の屋根形にデザインしたが、結果的にみれば、慰霊の際ノグチの手になるモニュメンタル性の強いオブジェを拝む形になるのではなく、人々が慰霊碑に相対したとき、視線の先に原爆ドームが自然に垣間見える様になって、平和公園は単なる慰霊施設ではなく平和を祈念し「平和を創り出すための工場」であるべきだという丹下の建設理念は、そのデザイン変更によってより明確となった。そこから、後にこれらの施設がピースセンターと呼ばれることにもなる。

香川県庁舎

その後、スチール製グリッドのシャープなエッジを見せた旧東京都庁舎や、日本伝統木造建築の木割り（日本の伝統的な木造建築において、各部分の大きさや寸法を規定する規範または原理。西洋建築におけるオーダーにあたる）をコンクリートで稠密に再現した香川県庁舎などの、いわゆる広島ピースセンターと合わせて初期三部作と呼ばれる傑作を設計した。とりわけ香川県庁舎は第二次世界大戦後の日本全国の地方自治体庁舎のモデルともなり、数多い丹下建築の中でも唯一のビルディング・タイプとなった建築である[19]。1961 年（昭和 36 年）に丹下健三・都市・建築設計研究所を設立。同年発表された海

上都市計画「東京計画 1960」は、日本発の都市計画の嚆矢として世界的にも評価が高い。丹下は生涯にわたって「建築家としてトータルに都市をデザインすること」に情熱を持ち続け、それにより都市的観点から構想された数々の総合的な建築計画が生み出され、その点が他の同世代の巨匠建築家と比較して違いが際立っているところである】。

壮年期の丹下は、日本国外からもたらされるシェル構造や折板構造などの様々な新技術や建築の新思潮を精力的に消化しながら、1964 年（昭和 39 年）の東京カテドラル聖マリア大聖堂と 東京オリンピック国立屋内総合競技場（正式名称：国立代々木屋内総合競技場）において、自身の建築歴の頂点を極めることになる。両作品ともに、当時の最先端の構造技術を咀嚼しながらも独自の発展を見せ、東京カテドラル聖マリア大聖堂では HP シェル構造を用い、国立屋内総合競技場では吊り構造を用いて、構造と形態を高度な次元で融合させながら、なおかつ至高性をも表現することに成功したモダンデザインの傑作である。前者は現代キリスト教会建築の中でも屈指のものであり、後者はコルビュジエのソビエト・パレス案からマッシュ・ノヴィツキーのノースカロライナ・アリーナ（ローリー競技場）を経て、ユーロ・サーリネンのイェール大学アイスホッケーリンクに至る流れの中で、吊り構造の決定打にして完成作とも評され、世界に衝撃を与えた。

特に東京オリンピックプールの評判は素晴らしく、アメリカ水泳選手団の団長は感激のあまり、「将来自分の骨を飛び込み台の根元に埋めてくれ」と申し出たと伝えられる程であった。大会後、国際オリンピック委員会は、東京都ならびに日本オリンピック組織委員会とともに、丹下健三を特別功労者として表彰した。ここにひとりの建築家が、その建築表現の持つ力によって、国際社会に与える影響力の大きさにおいても、主催者である行政や組織と比肩しうるものであることを全世界に実証したのである。それ以降、丹下健三の名は世界の人々に広く知られるところとなり、日本国外のビッグプロジェクトにも多く携わることになった。

大阪万博・お祭り広場の大屋根

1970 年（昭和 45 年）の大阪万博では、京都大学教授の西山卯三と共に総合プロデューサーをつとめ、その中心施設であるお祭り広場の設計も手がけた。「大屋根」をジャッキによる先駆的なリフトアップ工法で持ち上げ、それを太陽の塔が突き破ってそそり立つという岡本太郎とのコラボレーションは、今日に至るまでの語り草になっている。

建築のスタイルは本来モダニズム系統であり、当初はポストモダン建築を単なる意匠だと批判していたが、晩年にはポストモダンの傾向も取り入れた東京都庁や日光東照宮客殿・新社務所などの作品もある。最後の大作である東京都新庁舎は、ゴシック建築であるノートルダム大聖堂（パリ）の双塔の形態を引用するとともに、外壁面を複雑に凹凸させて陰影を深くし、さらに外壁 PC 板に濃淡二種類の花崗岩を打ち込むことによって、フェイクではあるが一見窓のようにも見せ、実際の窓枠よりもさらに細かく割るデザイン処理によって重厚さを演出した。丹下自身の言によれば、格子戸を思わせるデザインで和風を感じさせると同時に、情報化時代を IC（集積回路）のグリッドパターンで象徴させた所にポストモダン性があるとしている。

評価

日本の近代建築は、第二次世界大戦前においても西洋先進諸国と遜色ないレベルに達していたが、丹下の東京オリンピック国立屋内総合競技場（代々木体育館）によって初めて、明確に世界のトップレベルに引き上げられたと言ってよい。それ以後、日本建築界が非西洋諸国の枠を超えて、質・量ともに世界の建築界の中でも傑出した地位を築く道を、後進へと開いたと言える。第二次世界大戦後の日本建築界の重鎮であり、昭和という時代の国家的プロジェクトを背負い続けた建築家であるが、高度成長が終わり開発が一段落した大阪万博以降、その活躍の場は必然的に中東やアフリカ、また東南アジアの発展途上国に移っていった。唯一とも言える例外はイタリアである。

自らがアイデアを出して、それを単にスタッフに図面化させるのではなく、建築設計のオーケストレーションとも言えるプロダクション制を導入し、協同で設計する手法を確立した。それにより後年、丹下の下からは大谷幸夫・浅田孝・沖種郎・楨文彦・神谷宏治・磯崎新・黒川紀章・谷口吉生らの多くの優れた人材が輩出することになったが、反面、特に1980年（昭和55年）以降の作品において、独創性が犠牲にされたとの批判もある。

東京都庁舎（新都庁舎、1991年竣工）では指名コンペが行われたが、大方の予想通りに、当時の都知事・鈴木俊一との強いつながりを持つ丹下の設計案が当選し、「出来レース」とも評された。鈴木とのつながりは、鈴木が1964年東京オリンピックの準備のために、地方自治庁（後の自治省。現・総務省）から東京都副知事に出身したことさかのぼり、その後鈴木が大阪万博の事務局長に就任した経緯もあって、のちに鈴木が都知事選に初出馬した際には、丹下はその後援団体「マイタウンと呼べる東京をつくる会」の会長をつとめている。建築関係者からは、「自身のスタイル・信条であったはずのモダニズムを捨て、かつて出口なしとまで批判したポストモダニズムにすり寄り、大衆に媚を売ってまでコンペに勝たなかったのか」とか、「すでにある新宿の超高層ビル群に最も高いビルを加えただけであり、目新しいアイデアがない」などの意の厳しい批判を受けた。

一方、出来レースとの批判が予想されるなかで、重鎮となっても尚、そのような批判をはね除けるに足る圧倒的なパフォーマンスでコンペを勝ち抜く図太さや老獪さ、また成功した過去の自分のスタイルに拘泥しない柔軟さや、記念碑性を含めたデザイン意図の的確さといった点を評価する者もある。建築の専門家ほど酷評する傾向にあるが、一般には受けが良いようであり、完成以来観光名所となって、新宿副都心のランドマークとして認知されている。

かつて、ソビエト・パレスとの出会いが、大学受験間際になって志望を建築学科に変えさせたように、丹下に対するル・コルビュジエの強い影響は、卒業設計においても鮮明に出ている。そのことは、後年自らの作品にコルビュジエ由来のデザインを数多く引用していることでも明らかであるが、そのコルビュジエの計画案のひとつであるソビエト・パレスの圧倒的な影響のもとに、一對のマッス（量塊）と直交する軸線上の先にアイストップ（視線がとまる対象物）を配置するというプランは構想され、大東亜建設記念営造計画から広島平和記念公園、ナイジェリアの新首都新首都アブジャ都心計画に至るまで、たびたび用いられて丹下の十八番となった。

一方で、ランドスケープにおいて対称軸を通すということや、広場にモニュメンタルな象徴性を持たせるということ、ミケランジェロのカンピドリオ広場からの影響と見て取ることも出来る。丹下自身は晩年に至って、古今東西の建築家のなかで誰が一番かと問われると、コルビュジエよりもミケランジェ

ロの方が上だと言い、そのことは出世論文のタイトル「MICHELANGELO 頌」(頌とは誉め讃えるの意)においても明確に示されている。丹下はその論文の中でハイデガーのヘルダーリン論を援用し、グローピウス流の四角四面な建築幾何学から離れて、建築が自由な創造行為に昇華される過程で聖性(至高性・精神性)をも獲得し、社会的要請が建築を作るのではなく、建築家が建築行為を通じて世界を再創造していくという論旨を展開し、コペルニクスの転回によって建築と歴史との関係性を逆転させている[36]。

つまり、丹下はコルビュジエの近代建築の語法を用いながら、ミケランジェロの芸術の持つ宗教的な記念碑的超越性を、近代建築においても獲得させることをめざしているのである。そのことが個人生活においては、(ある意味、サグラダ・ファミリアにおけるアントニ・ガウディのような)建築するという行為への献身的な専心となって表れ、建築設計においては都市計画への強い関心となって現れた。かつてミケランジェロがルネサンスにおいて、サンピエトロ大聖堂大改築の主任設計士として中世を超克しようとしたように、あるいはマニエリスムの自由な芸術表現によってルネサンス様式そのものを超克しようとしたように、精神史の上で、コルビュジエがいうところの「建築をめざして」、近代を建築の力によって超克することを、丹下はめざしたのである。

そしてそのことを、目論見の成否は別にして、若き頃傾倒したマルクス主義に対する挫折からの脱却をめざした「大東亜記念営造計画」から、第二次世界大戦での敗戦の挫折においては、焦土からの脱却を「広島ピースセンター」で、同じく名誉的には、三等国から一等国への国際的復帰を「代々木オリンピックプール」で、さらには実質的な面においては、経済大国への脱皮を「大阪万国博覧会」の総合プロデュースによって、また大阪万博以降、力の振るいどころがなくなった日本国内への帰還をめざした「新都庁」に至るまで、生涯一貫して追求し続けていたと総括することが出来る。

建築史家の藤森照信によれば、丹下健三ほど純粋な建築家はなく、建築以外の分野にも、また自身の過去にも興味がなかったという。事実、これだけの巨匠でありながら、生前 MoMA (ニューヨーク近代美術館) に請われながらでさえ、過去一度も回顧展の類いが催されることがなかった。なお、丹下自身は、東京オリンピック国立屋内総合競技場(代々木体育館)と山梨文化会館を代表作だとしている。

2005 年(平成 17 年)3 月 22 日、心不全のため 91 歳で死去した際には、自ら設計した東京カテドラル聖マリア大聖堂(カトリック関口教会)で葬儀が行われた。葬儀では、磯崎新が時折涙で声を詰まらせながら弔辞を読んだ。生前カトリックの受洗に与っており、洗礼名は聖母マリアの夫であり大工でもあったヨセフであったことが、その時人々に知られた。

2006 年(平成 18 年)4 月、広島平和記念資料館が、村野藤吾の世界平和記念聖堂(1953 年、広島市中区幟町)とともに、第二次世界大戦後の建築としては初めての重要文化財(建造物)指定となっている。